

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第 18 回

第 5 章 古田足日先生

その 2 「散文性のかく得」(中の後半)

昨年(2024 年)は、古田足日・田畑精一の絵本『おいしいのぼうけん』(童心社 1974 年)の刊行 50 周年だった。私が古田足日先生(1927~2014 年)に出会ったのは、『おいしいのぼうけん』が刊行された、つぎの年。私は 19 歳だった。

「ねじれ」を生々の条件とする

「戦後という時間は敗戦国によってこそ濃密に生きられる。」としたのは、加藤典洋の「敗戦後論」(加藤『敗戦後論』講談社 1997 年所収。引用は同書による)である。加藤は、こうも述べる。

敗戦者たちは、もう胸の底でも自分の「義」を信じることができない。かつて自分を動かした「理」または「義」がじつは唾棄すべきもの、非理であり不義であると、認めざるをえなくなり、自分をささえていた真理の体系が自分の中で、崩壊するのを、経験しなくてはならない。すると、その先彼は、どういう「生」を生きていくことになるのか。

そこにはもう「正解」はない。

「正解」のない場所で生きること、加藤は、「ねじれ」と呼ぶ。——「戦争に負けるとは、ある場合には、そういう「ねじれ」を生々の条件とするということである。」

加藤典洋は、その「ねじれ」の感覚をもった人として、美濃部達吉や中野重治、太宰治、大岡昇平をあげるが、それなら、戦後の児童文学の世界で、その「ねじれ」をかかえた人はだれか。それは、やはり、古田足日ではないか。古田の文章「実感的道徳教育論」(『人間の科学』1964 年 3 月、『児童文学の思想』牧書店 1965 年所収。引用は同書による)を見てみよう。

古田は、1963 年、暗殺されたアメリカ大統領ジョン・F・ケネディの追悼ミサが東京の教会で行われ、そこに天皇の代理として皇太子が出席したのに、同時期に起こった日本国内の二つの大惨事、三池炭鉱爆発事故、東海道線の新子安一鶴見間での二重衝突事故に対して、天皇、皇太子は、特に哀悼の意を示さなかったといい、さらに、こう述べる。

天皇は、皇太子は、なぜ三池・鶴見の事故の日に弔旗をかかげなかったのか。ぼくは、歯が鳴る思いであった。

ここで弔旗のイメージが生まれる。弔旗の風景をよび起こしたのは、天皇である。そして、天皇が行ない、かつ行わなかった行為に対して、ぼくはなぜ歯をかみならすのか。これはぼくの天皇信仰のためにほかならない。ぼくは天皇にうら切られたのだ。

意識の上では天皇は、もうぼくのうちにはなかったはずである。だが心の奥底にやはり天皇は生きていた。かつての愛国心教育、あるいは二千年の伝統は根強い。

しかし——とぼくは思う。その根強い愛国心があったのなら、なぜ昭和二十年八月十五日、日本の家いえに弔旗がひるがえらなかったのか。

根強い一方、その愛国心はまったくもろかったのだ。一応天皇を中心に全国民的な規模での道徳は成立しているかのように見えていた。だが、弔旗はひるがえない。国民的規模での道徳は成立していなかった。

にもかかわらず、ぼくの心の表面から、天皇が消え去ったとき、ぼくは生き方を失った。敗戦とはぼくにとって根本的モラルの消滅であった。

「新しいモラル」をもとめて

1927（昭和2）年生まれの古田足日は、戦中は、肺浸潤のために学徒動員に参加できず、「「これでは国のためにならない」と思って、病友数人と特攻隊血書志願をしたが、受け入れられなかった。」（伊藤英治編「古田足日年譜」一九四三年・一六歳。『全集古田足日子どもの本』別巻、童心社1993年所収）「敗戦の日まで、またそのあとしばらくまで、みごとな軍国少年だった。」（同年譜・一九四五年・一八歳）（注）

古田の「実感的道徳教育論」は、「根強い一方、その愛国心はまったくもろかったのだ。」とした。加藤典洋は、それを日本人の意識における戦前戦中と戦後の「天皇との関係における「切断」と見るが（加藤『日本の無思想』平凡社新書1999年）、古田自身が自覚しているのは、「切断」よりも、みずからのなかに、ぬぐいがたくある「連続」だろう。そして、「連続」のなかに身を置いたとき、加藤典洋のいう「ねじれ」をかかえこまざるをえなくなるのだ。

「実感的道徳教育論」には、「のち、昭和二十六年、早稲田に入り、早大童話会に入会するまでの数年間の記憶はわずかの例外をのぞいてほとんど失われてしまっている。」「ぼくに必要なのは新しいモラルであった。」ともある。

古田は、同じ文章で、「ある児童文学者の発言より」として、「ね、きみ、童話とは／原理だよ。」ということばを引いているが、古田足日は、大阪外事専門学校を中退して再入学した早稲田大学で、「原理」としての童話に出会うことになる。古田の別の文章「現代児童文学史への視点」（『講座日本児童文学』5、明治書院1974年所収）を読むと、「ある児童文学者」というのは、「いぬのおまわりさん」ほかの作品で知られた童謡詩人で童話作家の佐藤義美だとわかる。——「彼は、童話の一つの事件を書くものではなく、いくつもの事件に共通するものを取り出し、新しいかたちを与えて書かなければならないから、小説より大変だ、「童話は原理だからね」といったのである。」しかし、子どもの文学の創造の当事者になったとき、古田は、「近代童話」を突きくずして、「現代児童文学」を生み出さなければならなかった。

「瑞穂の国ゼロ時間」

「さよなら未明」の評論家古田足日は、1961（昭和36）年に、はじめての創作単行本『ぬすまれた町』（理論社）を刊行する。『ぬすまれた町』については、前回書いたが、日常世界にしばしば非日常が呼び込まれ、現実のもつ二重性があばかれていく。作品は、そのことによって、戦後日本の状況をあらわそうとした。

1960年代後半、古田は、「戦争」にとりくんだ作品「瑞穂の国ゼロ時間」を書くことになる。「瑞穂の国ゼロ時間」は、はじめ、東京教育大学附属小学校・初等教

育研究会編集の雑誌『教育研究』に断続的に掲載されたのだが（1965年7月～66年3月、6月、9月、計11回、久米宏一絵）、未完におわっている。さらに、日本児童文学者協会の機関誌『日本児童文学』に、あらためて連載される（1967年9月～68年5月、9月、田畑精一絵）。冒頭に登場する南村弘少尉（『教育研究』）が中尉になっているといった、わずかのことをのぞいて、作品の設定はほぼそのまま、章立てを少しずつずらし、文章をある程度（部分的にはかなり）書き直しながら、第10回まで掲載されたが、やはり、中断してしまう。

「瑞穂の国ゼロ時間」は、1993（平成5）年に刊行された、古田の創作を中心とする全集（『全集古田足日子どもの本』全14巻、別巻1、童心社）にも収められていないから、少しくわしく紹介する。以下、『日本児童文学』の本文で見ていく。作品は、こう書きはじめられていた。

昭和二十年八月十五日、午後一時。

大日本帝国海軍航空隊大分基地の空は青く晴れ、飛行場にはかげろうがもえ立っていた。

飛行場のはずれ、夏草が子どもの背ほどもものびた茂みの中に、海軍中尉南村弘はくつをぬいで正座していた。

午後4時、大分飛行場から、11機の艦上爆撃機が飛び立つ。宇垣中将与それに追隨する者たちの日本帝国海軍最後の特攻だった。

目をつむれば、特攻隊員となって死んでいった若者たちの顔が浮かぶ。片道だけの燃料をつみ、飛行機もろとも敵艦に体当たりするよう命令したのは、この自分ではなかったか、と宇垣中尉^(ママ)は思う。

日本の勝利を信じたからであった。いや、勝たねばならぬからであった。だが、日本は降伏した。数百、数千の若者を殺しておいて自分ひとり生き残れるかと、長官は決心したのである。

その11機をさらに追いかけてきた零戦があった。作品冒頭で、飛行場の草むらのなかに正座していた南村中尉だ。「南村機、特攻に参加して護国の鬼となることを願う。」彼は、長官機に無電を打つ。――「リョウカイ、勇戦をいのる。」

これは、物語のプロローグである。第1章は「昭和四十年」。物語の時間は、プロローグから20年後のやはり夏になっている。東京郊外の団地に暮らす小学6年生、南村次郎と両親、祖父の南村久忠、そして、次郎の友だちふたりは、次郎の叔父の墓参りかねて、茨城県の山の村へ行く。叔父とは、無条件降伏後に出撃して死んだ南村弘だった。夜、次郎たちが泊まっていた大叔父の家の庭に、銀色にかがやく空飛ぶ円盤があらわれる。次郎は、「さあ、次郎。うちに帰るんだよ。」というささやきに引かれて、円盤に入っていく。次郎を呼んだのはヨシハルという青年、そして、円盤はタイムマシンだった。30世紀からやってきたヨシハルは、次郎のほんとうの兄で、3歳のとき、タイムマシンから落ち、20世紀で行方知れずになった弟をさがしにきたという。

円盤には、かつて零戦にのったまま死んだはずの南村弘が密航していた。弘は、昭和20年にタイムマシンに救われ、30世紀に行っていたらしい。弘は、30世紀の

少年少女5人を連れ、30世紀のすすんだ科学の力で、太平洋戦争における日本を勝利させるために、過去へむかおうとしていた。弘は、昭和6年、満州事変の起こった日の東京へ行きたかったのだが、ヨシハルとあらそっているうちに、円盤は、昭和16年12月8日未明、太平洋戦争開戦の時へと落ちていく。

「未来と現実」

「瑞穂の国ゼロ時間」をSF的な手法で書かれた作品といったら、平板な言いかたにすぎる気がする。

古田足日は、石川淳の「鷹」や安部公房「第四間氷期」といった作品を引き合いにした文章で、「ぼくたちは突然変異をこそとらえなければならぬでしょう。」と述べたことがあった（「未来と現実」『信濃教育』1960年3月、『児童文学の旗』理論社1970年所収。引用は同書による）。

八月十五日はぼくにとっては突然の出現でした。そして、その日がやってくるためには、毎日毎日、未来の要素がつみたてられていたはずでした。とすれば、現実のなかには、未来と現在が共存しています。あすのピースを作る人びとを未来とする見方（これは石川淳「鷹」のこと。ピースはタバコ—宮川注）、このデフォルメされた見方のほうが、リアリズムよりも現実を立体的につかんでいるのではないのでしょうか。

「瑞穂の国ゼロ時間」には、「未来と現在が共存する」現実が描かれようとしている。

戦時下の世界で、南村弘は科学者、ヨシハルはその弟になっている。そして、次郎の祖父久忠は、自由主義者と非難される中学校長、次郎自身は、国民学校の6年生だ。連載第7回には、昭和40年という「未来の記憶」をもつ者たちがひそかに集まる場面がある。

また沈黙がひろがり、次郎はその沈黙の重さの中で考えた。昭和十七年と昭和四十年と三十世紀と、その三つの時代のちがいをすこしずつ次郎は知っている。だが、どの時代もほんとうの感じがしないことではおなじなのだ。

では、ほんとうの時代とはどういう時代なのか。

祖父の南村久忠は、「こんどこそ悔いのない人生を送りたい」という。——「わしはここに残る。昭和四十年にもうそいつわりが多い。わしは学校の子どもたちをあいてに人間らしく生きてみたい。」30世紀から来た少年、吉岡は、「ぼくは先生の学校の生徒です。先生といっしょに残ります。」という。そして、次郎はいう。——「昭和四十年をここへもってこよう。ううん、昭和四十年よりもっとすばらしい世の中をだ。」次郎は、昭和17年に、「すばらしい世の中」をつくろうというのだ。祖父久忠は、「もし昭和十七年がもうすこしましな時代になれば、昭和四十年もきっともうすこしましな時代になるだろう。」といい、ヨシハルも、「三十世紀にも影響することになる。」と笑う。彼らは、昭和四十年や三十世紀をめざして、少しずつ未来を積み立てようとするのだ。作者は、敗戦によってかかえこむことになった、みずからの「ねじれ」について、戦時下の時間を生き直すことによって考え

直そうとしているかのようだ。ところが、物語は、ほどなく中断にいたる。

一方、科学者になっている南村弘は、新しいレーダーを完成させ、それによって、ミッドウェー海戦での日本の勝利をみちびく（『教育研究』の連載はこのあたりで中絶している）。山本五十六長官は、すでに、新しい兵器の開発を弘に依頼したという。弘は、彼なりに未来を着々と積み立てていた。次郎は、弘の研究室をたずねていく。

「来たか。ちょっと待っている」

弘はそのままの姿勢だ。そのうしろに立った次郎はポケットからナイフを取り出し、弘の背中、むかって左のがわ、心ぞうのある場所にねらいをつけて、力いっぱい突き出した。

これが連載第10回の幕切れである。（つづく）とあるけれども、つづきが書かれないまま、古田先生は亡くなった。

「瑞穂の国ゼロ時間」は、なぜ中断してしまったのか。上に引いたくだりで、弘による「のぞましくない未来」は阻止されたものの、次郎たちによる「のぞましい未来」の積み立てをうまく描くことができなかったからだろうか。「のぞましい未来」の積み立ては、古田足日が主張した散文的なことばによって、具体的に、そして、順序立てて書かれなければならなかった。

1960年代の「戦争児童文学」

1960年代、戦争の悲惨を子どもたちに伝えようとする児童文学作品がつぎつぎに書かれた。多くは、太平洋戦争のある体験（出征、空襲、学童疎開、原爆……）を切りとった短編である。大野允子ら、広島の子供文学同人誌『子どもの家』に拠る4人の女性作家の17編の作品を収めた原爆童話集『つるのとぶ日』（東都書房1963年）などに代表される。

「戦争児童文学」ということばも使われるようになった。「戦争児童文学」とは、戦後に書かれた「反戦平和の願いを託した児童文学」のことをいう（日本児童文学学会編『児童文学事典』東京書籍1988年、「戦争児童文学」の項、執筆は関口安義）。だが、次第に、過去の体験を子どもたちに語り伝える困難さや限界も意識されるようになった。現代の子どもたちを戦争に出会わせ、子どもたちに戦争の全体像を示そうとするとき、やがて、ファンタジーやSFの手法によって「戦争」を書こうとするようになる。松谷みよ子『ふたりのイーダ』（講談社1969年）や、三木卓『ほろびた国の旅』（盛光社1969年）などをその試みとしてあげることができる。

しかし、古田足日の「瑞穂の国ゼロ時間」が相当のところまで書きすすめられながら、中断してしまったことによって、60年代の「戦争児童文学」は、その可能性を最大値まで極めないままにおわっているのではないか。「瑞穂の国ゼロ時間」がかかえこんでいる「ねじれ」を考えると、もし、作品が完成していれば、この時期の児童文学作品としても、可能性の振幅をもっとも大きくふるものになっていたと思われるのだ。

60年代以降の古田足日の創作について、もう少し見ていきたい。（つづく）

（注）

伊藤英治編「古田足日年譜」（前掲）の一九四五年・一八歳には、つぎのようにある。

大阪府枚方・交野にある陸軍造兵工廠で火薬製造（学徒動員—宮川注）。火薬の原料がなくて、自給自足の塩づくりのため、大阪浜寺の海岸へ行く。浜寺で一晩ねた翌日が八月十五日＝敗戦。天皇の雑音だらけのラジオ放送を聞き、日本が負けたということがわかり、泣きながら海に泳ぎだした。天皇に申し訳ないと思う。まっ青な空、まっ青な海に浮かんだ点のような自分が、その後の自分の中にずっと突出した原風景として生き続けている。ロシア語科（当時在籍した大阪外事専門学校の一宮川注）の友人と東京に行き、皇太子を天皇にして戦争を続行しようと考えたり、それがだめなら切腹しようと思書を書いたりする。このように敗戦の日まで、また、そのあとしばらくまで、みごとな軍国少年だった。

（付記） 宮川健郎「一九六〇年代児童文学素描——現代日本児童文学史の再構想——」（『昭和文学研究』第39集、1999年9月）と内容が重複することをおことわりします。